

# 同志社を愛して止まず

## ——故名誉教授青井厚先生の面影——

嶋 田 啓一郎

まなこを閉じてわが八十年の人生を回顧するき、そこに種々のタイプの友が、明暗の面持ちをもって歩み寄る。

私が同志社で巡り逢った友のなかには、佛法でいえば悽慘を極める闘争の阿修羅や、人を害する鬼面の夜叉には、殆んど出会わなかった。釈迦三尊の文珠・善賢菩薩、或いは阿修羅と戦う帝釈天、福德を司る吉祥天、煩惱即菩提の本尊と見られる愛染明王といったところが、同志社人に親近感のもてる姿である。

わが竹馬の友、故青井厚先生はつねに柔和温厚、静寂誠実、寧ろアツシジのフランスの風貌を感じさせる安らかさに溢れていた。

青井先生は、一九〇七年六月五日福井市の生れ。私と同じ組合教会で少年時代を過ごした二年先輩。先生の生家のすぐ近所に、後に旧東京帝大文学教授となられた大島清兄や、私の幼稚園同級の後になが国心臓学界の達人となった榎原仟君の家があった。共に評判の美しいクリスチャンホームであった。少年時代の聖書への親しみと仏教の盛んな福井の街の雰囲気とは、同志社に間近く相国寺の傍らに居を構えられた青井先生の人柄に、終生、独自の人格主義的な薫りを与えずにはおかなかった。

った。

一九三三年、同志社大学法学部経済学科を卒業、同志社専門学校講師を勤める傍ら、当時の京都帝大文学部哲学科の選科を終了。典型的な理想主義的篤学青年であった。

戦後、厚生学科から社会学科に編成替えの後、同志社学風にふさわしい社会学科の感覚のゆたかな社会学徒を迎えたいという希望から、四九年四月、文学部助教授として社会学科にお迎えすることになった。

青井先生の学風に大きな影響を与えたのは、当時の形式社会学的伝統に発する斯界の碩学の面々であった。そのなかに、京大の重鎮、経済学を社会学的視角から究明する独特の学風を開拓された高田保馬先生があった。青井家と背中合せのように近い高田邸を、青井先生と共に度々訪問して、私も大いにその余慶を蒙った者の一人である。同志社の文化社会学の難波紋吉教授、また小松堅太郎教授、京大の向井二尚教授等に学ぶ機会を多くもたれた。

青井先生の著書『社会学講義』（一九五一年）より、『新制社会学通論』（一九五五年）に進むにあたって、東北大学新明正道教授の「総



合社会学」的方法論との関係を深め、社会生活についての機能的考察を進めるとともに、社会生活を全体として捉え、諸文化、諸社会形象を、この全体の部分として観察する立場をとっている。青井理論は、多年の社会学史の積み上げを背景として、近年の社会学史が実証主義的・自然科学傾向を深めつつあることに対して、ギンズバーク、マンハイム、ローキン等の社会哲学的構想に学んで、社会生活全体の総合的認識の必要を強調しているところに、特徴をもっていると云い得るであろう。そこに人間学、世界観をつねに問いつける青井理論の若き日以来の思想的執念が籠っているのである。

社会福祉学の研究方法において、「力動的統合理論」への道を開拓し続けてきた私は、青井先生のこの方法論に、深い関心を寄せてきた。波のない渝らぬ誠実と友情の人、青井先生は永年に亘って、休暇には必ず来訪されて、学問上の四方山話を楽しんだのであるが、その朴訥で質実、福井訛りの語り口は、この頃の才気煥発の都会っ子には、その思考の人間学的深遠さを理解しにくいものになっているも知れぬ、と感じさせることもあった。

「命も要らず名も要らず、官位も金も要らぬ人は始末に困るものなり。此の始末に困る人ならでは、艱難を共にして、国家の大業は成し得られぬなり」(西郷隆盛) 命はさておき、名誉も地位も金も求めず、ひたすら新島襄先生の遺風を慕って、自己の持ち場で、コッコツと研究と教育に精進一路の献身を続けている同志社人には、頭がさがる。この「平凡の偉大さ」の蓄積こそ、「私学同志社」の堅実な基礎づくりとなるからである。演出の多過ぎる今の世に、一方では青井先生のような人物の功績をもっと大切に評価したいと思う。

青井先生の生涯不動、渝らぬ献身生活を質的に支えて来られたフサ夫人の、それこそ「一生懸命」の隠れた協力を尊く思う。その遺族、二人娘の一人は会社員の妻。一人は鹿児島大学医学部教授の妻。その気品ある雰囲気は、まさにその御両親の人柄の活きた証しである。令弟末治兄は同志社大学英文学科出身。青井厚先生 一九八九年七月四日逝去、享年八二歳。

(大学名誉教授)

# 「学びて厭わず」—内田智雄先生の 思い出

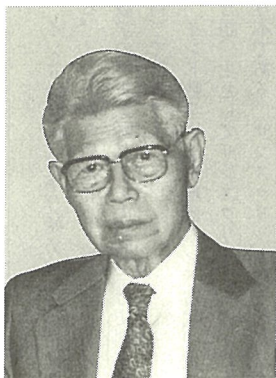
西 田 毅

東洋法制史学界の權威として、また優れた教育者として、充実した八三年の生涯を送られた内田智雄先生の御業績を、専攻を異にする私が詳細に語り得る資格があるなどとは到底思えない。そこで、ここでは、学部学生のころから今日まで三〇余年の長きにわたって学問の世界で不断の激励を惜しまれなかった先生の思い出を記すことによって、先生の学問と人間の一端をあきらかにできればと思ひ、あえてペンを執った次第である。

日本政治思想史を専攻する私は、先生の代表作やライフワークの著述には齒が立たず、専ら、内田法制史学の周辺あるいは山麓とでもいべき領域に関心を寄せるにすぎなかった。そんな私が研究室に残ったころ、先生は、ライフワークの『訳注中国歴代刑法志』に取り組んでおられた。それは一四年余の歳月と四九七回の研究会を重ねて、昭和四五年に漸く正統二巻の大著となつて公刊された。訳注に没頭しておられたちょうどそのころ、当時明德館三階にあつた法学部研究室で先生にお会いすると、訳業やテキスト・クリティークは、いわば学問の基礎的作業にあたる仕事で、その重要性はよくわかるが、自分の本来の関

心は、むしろ、思想史の研究にあるといわれたコトバが妙に私の印象に残っている。

内田先生の学問上の宿志が、歴史の研究、それも中国古代の思想史の研究にあつたとすれば、それはやはり、恩師小島祐馬の影響とみるべきであろう。ここで直ちに思い起されるのは、私が大学院の学生時代に読んでいた小島の『中国の政治思想』（「ハーバード・燕京・同志社東方文化講座委員会、一九五六）である。同時期に講読していただいた梁啓超の『先秦政治思想史』とともに、それらはいずれも古代中国の政治思想の特質を分析した文献であり、当時は不敏にして気付かなかったが、それは、受講生が私のような政治学専攻の学生であつたということに由来する以上に、先生御自身の内発的関心に基づく選択であつたと思う。こうした中国古代思想に対する何十年来の御関心の一端が晩年の『論語私感』となつて現れたのである。雑誌の連載がはじまつた一九七九年一月に落手した端書には、この間の事情に触れられて、「これはきわめて短篇ながら若干の野心をもつて書きかけたもので、そのため毎号の締切日が気になり、これに相当な時間と労力をかけてい



ます。先人の著書頗る多いなかでの「私感」、これからのようにもつていくか、始終頭を離れません」と書かれている。

完成した『論語私感』（創文社、一九八一年）の序文には、若い日の著者が武者小路実篤の同名の『論語私感』にいたく感動したことが述べられており、とくに、武者小路が、論語の逐条解釈や訓詁の方法をとらずに論語の章句を自由に選択し、独自の人生観に基づいて解釈している点の新鮮さに瞠目したと語られている。しかし、先生がこの本で採った論語の扱い方は、武者小路のそれとは基本的に異なり、より学問的に、いいかえれば「論語の章句のそれぞれの意味」を正確にとらえ、それに「なにほどのかの脈絡をつけ」て、曖昧なことばの意味を明らかにするといった語義の解明に力点がおかれている。鈴木成高は、書評で、当時すでに若くしてシナ学の専門家であった先生が、鈴木と同様に武者小路の型にはまらぬ自由な古典解釈に感動したことに少なからぬ驚ろきを示しながら、しかし、本書は広い学問的地平と高い次元に立った現代のシナ学のもつ訓詁注釈の学問的水準の中から生まれ出た点に武者小路の『論語私感』との

ちがいがあると論評している（『「論語」と私——内田智雄「論語私感」に寄せて』、『創文』一九八一年六月）。そして、本書の礼楽の解釈に言及して、詩経の世界をくぐり、また、制度という問題と取り組んできた人にして始めて可能な深い礼楽の研究であるとして、若い日のM・グラネの訳者（『支那古代の祭礼と歌謡』の訳者）内田と法制史学者内田という二つの顔をもった先生の特徴が本書で十分生きていることを強調している。

先生が亡くなられる一カ月前に頂戴した最後の端書には、グラネの旧訳をはじめ、四冊の旧著が次々と再版されるという朗報が記されており、それらの仕事は、いずれも当時、仮りそめに書いたものではなかったといささかの自負が文面にこめられていた。そして、改めて、「著作は心して出すべきであること」が説かれている。

論語（述而篇2）に「子曰く、黙してこれを識し、学びて厭わず、人を誨えて倦まず、何か我にあらんや」という一句があるが、先生こそまさにこの章句を生涯の鑑戒にしておられたのではないか。

慎しんで先生の御冥福をお祈りしたい。

# 井深八重さんのこと

秦 芳 江

故カタリナ  
井深八重 略歴

明治30年10月23日 台湾 台北に生る  
大正7年 同志社女学校専門学部英  
文科卒業 長崎県立高等

12年 女学校英語科奉職  
看護婦資格取得 神山復  
生病院に就職 婦長

昭和30年9月 保健文化賞受賞  
30年11月 日本カトリック看護協会  
初代会長に就任

34年5月 ローマ教皇より聖十字勲  
章受賞

34年10月 黄綬褒章受賞  
36年5月 ナイチンゲール記章受賞  
40年11月 勲五等宝冠章受賞

50年5月 同志社大学名誉文化博士  
受章  
52年5月 日本カトリック看護協  
会々長辞任

53年1月 名誉会長となる  
54年4月 朝日社会福祉賞受賞  
婦長を辞任し名誉婦長と  
なる

平成元年5月15日 死去

晩年の井深さんの杖となつて看護された山浦シスターからの訃報で、かけつけた翌朝の五月十六日は、神山復生病院の創立百周年記念祝典の当日であつた。紅白の幕に飾られた園内の簡素な職員宿舎の一室に、そのひとは、高松宮妃からのバラ色のおふとんと、沢山の花に包まれて、童女のように、ふつくらと愛らしく永遠の眠りについておられた。その清らかさと美しさは、必ず天国を約束された方へのみ許されたお姿ではないかと、お別れの涙のなかで思い、最初奇異に感じた病院内のうきうきとした雰囲気も、聖女井深さんが、主のみ許に凱旋される日にいつそふさわしいのではないかと思ひ直したのである。

さて、私が井深さんを知つたのは、彼女をモデルにしたといわれた昭和十年頃の婦人雑誌の映画ストーリーからである。おませな小学生であつた私は、当時の人気女優、夏川静枝の紛したヒロインの運命に、今は亡き母とともに涙したものであつた。

……キリスト教界名門の令嬢として、美しく才能に溢れたひとりの女性が、京都の学校



を卒業して、長崎の女学校の英語の教師として希望にみちて赴任する。彼女は愛する教え子達と、そして、そのストーリーによれば、すてきな婚約者によって、最高の幸せを約束されたかのようにあったが、ある日、皮膚に生じたささやかな病変によって、それらの愛する周囲と引き裂かれ、行先も告げられず、草茫茫の原野を、ござで囲った馬力にのせられて、到着したのが富士山麓の癪病院であった。当時、天刑病と忌み嫌われていた病名を告げられた彼女の絶望はどんなであったろう。運命の激変に何度も命を絶とうとし、その度にフランス人老神父にとめられる。ある日、その神父のすすめによって再検査を受けたところ、誤診であったことが判明して、即刻退院許可がおりる。しかし、彼女は眼前に癪者の悲惨を見、同胞でさえも手を差しのべない病者に献身する老神父の姿に、自分がここに遭わされたのは神の意志であるとの使命感にめざめ、神父の片腕となるべく、この地に止まる決心をする。……（この間の事情については、女子大学学報『しばぐさ百周年記念号』に、井深さん自身の手で詳しくのべられている。）

み摂理のままにと思いのびきぬ

なべては ふかく胸につつみて 八重  
このあこがれの君に初めておめにかかったのは、同志社が名誉博士号を差上げた際の、同窓会の歓迎会の席上であった。そして、井深さんがまた、私と同じ位の、花とネコの愛好者であることを発見した。春休みの度にお訪ねした病院の花ざかりの木蓮や連翹の下で、また、達筆のお便りには、かならず、毎朝のミサでは母校同志社と教職員学生のひとりひとりの為に祈っておられること「今私にできるのは祈ることだけですから」というお言葉があった。

生前お願いした色紙が、田辺の女子大学体育館の正面玄関に掲げてある。その「汝、若き日に創造主を覚えよ」という聖句は、同志社女子部の教育的伝統の核心ともいえるべき「信仰と愛と奉仕」にその生涯を貫ぬいた私達の誇りである井深さんが、今なお肉声をもって若い人達に語りかけているように思われるのである。

——今年はおとしお「ひとりしずか」の白い花が咲く春が待たれてならない。

（女子大学教授）